

## 第26回 東京芸術文化評議会 議事要旨

- 1 日 時 平成31年2月19日（火曜日）15時00分から15時55分まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 青柳評議員、浅葉評議員、太下評議員、大野評議員、野田評議員、  
矢内評議員、吉本評議員、小池知事
- 4 議 事 (1) Tokyo Tokyo FESTIVALの展開について  
(2) その他

### 5 発言内容

○**青柳会長** ただいまより、第26回東京芸術文化評議会を開催いたします。お忙しい中、どうもありがとうございます。

今日は、7名の評議員の方に御出席いただいております。

それでは、早速でございますけれども、小池知事のほうから、御挨拶いただきたいと思っております。

○**小池知事** 皆様こんにちは、お忙しいところ、また、足元の悪いところ、御出席を賜りまして、ありがとうございます。第26回の東京芸術文化評議会、これから開催となります。よろしく願いいたします。

東京大会まで数えること521日ということで、順調にハード面、そしてソフト面、両方、加速度的に前進しているところでございます。ますます東京への注目がこれから高まってくることを期待しておりますし、また、そのための努力を、文化面から支えていただければと存じます。

昨年11月には、姉妹都市でありますパリの市庁舎、市役所の真ん前で、大風呂敷を広げてまいりまして、大変好評でございました。「FUROSHIKI PARIS」ということで、パリ東京文化タンデムというのもございまして、皆様方にも御協力をいただきながら、幾つかの東京としてのイベントを行ってまいりました。からくり人形なども大変人気がございましたし、アール・ブリュットのほうも、非常にこちらも多くの方々を感動させる、そのような作品をお揃えいただいたということでございます。

「Tokyo Tokyo FESTIVAL」、これを通じ、東京からの文化の発信で、続けてまいりたいと思っておりますので、まさしく今日の議題として、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」のあり方、コンセプトのコピーとステートメントの作成もしておりますので、今後のプロモーションの展開について発表したところでございますが、これからの企画公募につきましても、既に発表させていただいております。ここをさらに磨きをかけていきたいと思っておりますので、皆様方の貴重な御意見、よろしく願いいたします。

それから、昨年11月には吉本評議員にも御出席いただきまして、羽田空港で第1弾のイベントも開催したところでございます。様々なイベントを通じまして、また、プロモー

ションをさらに発信力を強め、訴求力を強めてまいりたいと思っております。文化の祭典にふさわしい盛り上げにしていまいたく、よろしく願い申し上げます。

ありがとうございます。

○青柳会長 どうもありがとうございました。

続きまして、本日は第6期の評議会で初出席になる評議員の方がいらっしゃいますので、御紹介申し上げたいと思います。

浅葉克己評議員です。一言お願いします。

○浅葉評議員 皆さんこんにちは。随分長くやってたんですけども、何もしていないなという感じもあるんですね。でも、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」は筆文字と、活字体でキメたんですけどね。そのぐらいかな。

○小池知事 ありがとうございます。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、次第に沿って進めたいと思います。

本日の議事は公表前の内容が含まれていますので、運営要綱に基づいて、会議を非公開とし、後日資料や議事録を公開したいと思いますが、いかがでございましょうか。

(異議なし)

○青柳会長 ありがとうございます。

では、特に異議がないようですので、そのように進めさせていただきたいと思います。

恐れ入りますけれども、報道関係の方におかれましては、御退席をお願い申し上げます。

それでは、本日1つ目の議事である「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の展開から始めたいと思います。

事務局より、説明よろしく願いいたします。

○魅力発信プロジェクト担当部長 では、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の展開について、御説明させていただきます。お手元のタブレットまたは前方のスクリーンを御覧ください。

東京都では、東京2020大会に向けた文化プログラムを、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」と銘打って展開しているところですが、大会まで間もなく500日となるタイミングをとらえ、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」のコンセプトをより多くの方に伝えるため、端的に短い言葉でコンセプトを表したコピーと、そのコピーの内容を紐解きわかりやすく説明したステートメントを作成いたしました。あわせて、コピーやステートメントを活用したビジュアルデザインも作成し、今後、ポスターやグッズなどに使用してまいります。

プロモーションの実施にあたりましては、主要駅や電車内などへの掲出、展開も集中的に行うなど、さらなる盛り上げを図ってまいります。

また、象徴的な事業である企画公募事業につきましても、2020年に向けて継続的に注目されるよう、効果的な手法や時期を工夫しながら発表してまいります。

次のスライドを御覧ください。

先般作成いたしましたコンセプトコピー及びステートメントでございます。

東京芸術文化評議会のもとに設置している文化プログラム推進部会での議論をもとに決定し、2月1日の定例会見で知事から発表させていただいたところです。日本語のコンセプトコピーは、「文化でつながる。未来とつながる。」です。東京独自の芸術文化を通じて、言語や国籍の違い、障害の有無等を超えて、人々がつながり、それが未来へとつながっていくイメージを表現しています。

英語のコンセプトコピーは、「THE FUTURE IS ART」です。「アートには将来がある」、「アートこそが進むべき道を示してくれる」という意味を込め、未来への希望をイメージして表現しています。

これらのコピーは、参考としてお示ししているような形で、既に展開している「Tokyo Tokyo FESTIVAL」のアイコンと組み合わせて展開してまいります。

また、右側にお示ししているのが、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」のコンセプトを表したステートメントでございます。

では、次のスライドを御覧ください。

今回、これらのコピーやステートメントを活用したビジュアルデザインも作成いたしました。これらを用いて広報を展開してまいります。

次のスライドを御覧ください。

具体的な広報展開でございますが、まずはこの2月、3月におきまして、鉄道各線の主要駅のデジタルサイネージや、電車内のトレインチャンネルなどを中心に実施いたします。写真は2月の初めに実施いたしました、新宿駅と渋谷駅の状況でございます。

加えまして、3月末には、昨年11月に次ぐ第2弾となるプロモーションイベントの開催も予定しており、現在準備を進めているところでございます。

続きまして、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」企画公募事業について、御説明いたします。

企画公募事業につきましては、昨年10月の東京芸術文化評議会での採択事業のイメージを御紹介いたしました。採択した13件のうち、準備の調いつつある5件の概要につきまして、2月1日に発表したところでございます。本日はその5件につきまして、改めて御報告するとともに、残りの8件についても簡単に御紹介させていただきます。

初めに、2月1日に発表済みの5件でございます。

表の左側が仮の企画タイトル、右側が企画者、下段に企画の概要を記載しております。

1つ目は、ライゾマティクスの、「SYN LIGHT DANCE IN TOKYO～東京の未来を視る」です。2016年のリオ大会閉会式における東京2020大会のプレゼンテーションのAR表現やプロジェクション映像、演出技術開発を手がけたライゾマティクスが独自に研究開発してきた、最新のメディアテクノロジーと通信技術の革新を組み合わせた実験的なアート空間の創出をめざします。

開催場所や周辺都市環境を利用しながら、新しい音と光を用いた参加体験型インスタレ

ーションと、ライブイベントを実施する予定です

次に、公益社団法人全日本郷土芸能協会の、「世界無形文化遺産フェスティバル」です。こちらは、世界各地に伝承されている舞踊や音楽などの伝統文化や芸能を集めて披露し、人々の交流を通じて文化の多様性と共生の意義を伝え、文化の未来への継承につなげます。

3番目、全日本ダンストラック協会の、「DANCE TRUCK TOKYO」です。トラックの荷台を舞台として、トラックの移動性や機動力を生かし、島しょも含め、都内のさまざまな地域の街中で展開する、モバイルのダンスプロジェクトです。一部ではソーラーパネルを設置したトラックも使用する予定でございます。日本のコンテンポラリーダンスを牽引する振付家・ダンサーの東野祥子氏がディレクションを務め、多分野の先鋭的なアーティストが参加します。トラックの空間を身体／光／音で一体となる装置に変容させ、周りの環境とも呼応する、その場所独自のパフォーマンスを展開いたします。

次は、「TOKYO SENTO Festival 2020」です。アーティストが浴場内のペンキ絵を手がけるほか、銭湯を新たなタイプのイベント会場として活用することで、伝統的な人々の憩いの場・コミュニティーである日本独自の銭湯の魅力を世界に発信してまいります。

5番目が、アーティスト集団、目によるプロジェクト、「まさゆめ」です。世界中から顔を募集し、その中から1人を選び、選ばれた人の顔の巨大なオブジェを制作して、2020年の東京の空に浮かべます。浮かべるべき1人の顔を選定するプロセスの中で、人々との対話を通じ共にプロジェクトの意味や本質について考えるとともに、都市空間にインパクトを与え、祝祭的な光景をつくります。

次のページを御覧ください。残りの8件のプロジェクトについて、簡単になりますが御紹介いたします。1つ目はイギリスからの応募で、Jason Bruges Studioの「The Constant Gardeners」です。ロボット工学を利用しスポーツの動きを取り入れながら、日本の庭園にあるような模様を描くインスタレーションを予定しております。

次はアルゼンチンのアーティスト、Marco Canaleの企画、「The speed of light」です。高齢者の記憶と夢に寄り添いながら、ストーリーを展開し、東京の街並みを旅して歩く、ツアー型の演劇作品を上映いたします。

続きまして、特定非営利活動法人トッピングイーストの「隅田川怒涛」です。こちらは江戸期の華やかな営みの場であった隅田川の現代における意義を再考することを目指し、隅田川及び周辺を舞台とした参加型の音楽アートフェスティバルを実施いたします。

次に、特定非営利活動法人ダンスアーカイヴ構想の「TOKYO REAL UNDERGROUND」です。1960年の東京で生まれた世界的な舞踏を中心に、それに影響された様々な表現を東京の地下空間で行います。

そして、「パビリオン・トウキョウ2020」です。東京各所にパビリオンを展開し、最先端の日本建築のショーケースとなるプロジェクトです。世界にまだ知られていない日本文化としての建築の魅力を伝えていくことを目指していきます。

続きまして、「放課後ダイバーシティ・ダンス」です。学校や地域と連携し、舞踊をつくる楽しさを共有する新たな地域文化の創出を目指すプロジェクトです。

次に漫画「もしも東京」展実行委員会の、「漫画『もしも東京』展」です。有名な漫画家が描いた様々な東京の都市の姿を展示する展覧会です。

最後に13件目ですが、こちらにつきましては、サプライズ案件として、しかるべきタイミングまで秘密にさせていただきたいと存じます。インパクトのある企画でございますので、発表のときを楽しみにしていただければと思います。

このように企画公募で採択した案件はバラエティに富んでおり、また2020年の東京だからこそ、実現できる企画となっております。各企画とも現在、鋭意準備を進めているところですので、時期を見て進捗状況などにつきましても、また御報告させていただければと思っております。

なお、本日御紹介した後半の8件につきましては、27日に実施する記者懇談会で、マスコミに公表する予定としておりますので、27日までは情報のお取り扱いに御配慮いただきますよう、よろしくお願いいたします。

事務局からの説明は以上でございます。

○青柳会長 どうもありがとうございます。

企画公募の委員長をやった吉本さん何かありますか。

○吉本評議員 そうですね、ようやく知事の会見で5件、公表いただいて、そして今日ほかの案件、1つはサプライズということで、楽しみにしてくださいということになっているんですけども、近々、記者懇談会でも発表できるということになっています。今、実際に事業者の方と検討しているものもあるので、なかなか最終形が見えない部分もあるんですけども、非常に多岐に富んでいて、国際交流的なものから、先端技術を使ったもの、トラックで東京中を回るようなものなど、いろいろあって、それなりに話題性の高いものが13件揃っているんじゃないかなというふうに思います。

○青柳会長 ありがとうございます。

ただいま、吉本評議員、それから事務局より説明がありました。「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の展開につきまして、何か評議員の方々の御意見ございますでしょうか。

何かあります、野田さん。

○野田評議員 おもしろそうだなと思いました。自分の東京キャラバンにも一緒に参加してもらって、以後、参加してもらったりするといいかなと思いました。

○青柳会長 ありがとうございます。それでは、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」においては、コピーとステートメントが決まり、既に都内の主要駅で、ビジュアルを使ったプロモーションも実施されておりまして、今後、年度末、来年度に向けて更なる展開が期待されているところでございます。

また、企画公募事業につきましては、1つ1つの事業について、大いに期待していると

ころでございます。まだ、発表されていない8件、今、ここでは発表されましたけれども、中には、世間があつと驚くような企画も残っております。ぜひ、2020年に向けた盛り上がりの中で、効果的に発表するとともに、着実に実施していきたいと思ひます。

本件につきましては、協議会として了承し、事務局には本日、評議員の皆様よりいただいた御意見等を踏まえまして、2020年大会を文化の面から大いに盛り上げる取組をお願いしたいと思ひます。

どうぞよろしくお願ひいたします。

○吉本評議員 このコピーとステートメントのことについて、部会で議論があつたことを御紹介ができたらと思ひます。スライドも該当ページを出していただきたらと思ひます。すけれども。

この日本語のコピーは、それこそ2、30はあつた中から部会でやっぱり未来志向のものをぜひひ出そうということで、3件に絞り込みまして、最後、小池知事にこれをお選ひいただいたということになります。

それから、英語のほうは「THE FUTURE IS ART」となつておりまして、これ私なんか考えると「ART IS THE FUTURE」じゃないかと思つてしまうんですけども、英語のネイティブの方に聞くと、例えば、海外の学校の卒業式なんかで、校長先生が生徒に向かつて、「THE FUTURE IS YOU」と、要するに未来は君たちがつくっていくんだみたいな言い方をするということなので、このほうがメッセージ性が高いだろうと。そして想定されることとして、今後は海外メディアなんか取材に来たときに、例えば、BBCのヘッドラインでこういうのが流れたときに、ちゃんとメッセージが伝わるようにということも踏まえて、こういう英語になつたということでございます。

それから、右側のステートメントのほうも、これも部会でさんざん議論して、ご覧いただいている案になつたということなんですけれども、TTF全体として、いろんなバリエーションがある中で、それを何のためにやるのか、東京はそのことで、どういうことを世界、あるいは都民の皆さんに伝えたいと思つているのかというようなことを込めた内容としてつくられています。

4パラグラフ目には、「伝統と現代」というふうにありますけれども、これは「Tokyo Tokyo FESTIVAL」のロゴの部分に埋め込んだ形で、メッセージを伝えたいと思つています。ステートメントの英語版も作成をしておりますので、そちらもぜひ海外に向けて、東京文化の発信を高めていけたらなというふうにお願ひしております。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

この「THE FUTURE IS ART」というのはすごく時宜を得ていると思ひますけれども、1つはアメリカで5年くらい前まではSTEMといって、「Science Technology Engineering and Mathematics」だけだつたんですね。それを政府がアメリカの大学にな

るべくそれをちゃんとやれと、最近それだけじゃだめだっているんで、STEAMになったんですね。「Science Technology Engineering Art and Mathematics」、アートが入って、アメリカ政府までちゃんといれているんですね。そういう意味でも「THE FUTURE IS ART」は非常にいい言葉ですね。

○大野評議員 「まさゆめ」というのは、ものすごく規模が大きいプロジェクトでございますけれども、これは、単純な質問として、どのような方々がセレクトするのかということに関しては何か既に具体的なアイデアはおありなんでしょうか。

○吉本評議員 これもまだ、アーティストがアーツカウンシル東京と検討している状況ですけれども、基本的に世界中からとにかく誰でも自分の顔を応募できるようになっています。「目」というのは3人のアーティスト・ユニットなんですけれども、その1人が見た夢にもとづいて、ある1人の顔が選ばれて、それがバルーンとして浮かぶという、これも相当大きな規模のバルーンになるんですけれども、今は、どこまで言っているか悩みながら報告を返しますと、都心部と、多摩地域の2か所でそういうものを展開しようよということで、検討しているはずですよ。これも、実現すると、相当話題性が高いというか、「あれ、何」「いや、TTFだよ」という、そんなふうになるんじゃないか。

○小池知事 パラに絡むようなものはありますか。

○吉本評議員 パラリンピックに絡むようなものとしては、障がい者に焦点を当てたプロジェクトにも随分と提案があったんですけど、直接それにフォーカスするものというのは、残念ながら選ばれていません。ただ、ダイバーシティということは全体を通じてテーマになっていますので、当然ながら障がいの方々にも参加していただく、そういうものも含めて用意できていると思います。

○青柳会長 よろしいでしょうか。ありがとうございます。

それでは、次に移りたいと思います。ここでは評議員の方が進めていらっしゃる、プロジェクトについて御報告をまずいただきたいと思います。

初めに、大野評議員からどうかよろしくお願いいたします。

○大野評議員 この東京文化芸術評議会の第1回目が開催されましたときに、私は何かしらの五輪と呼ばれるもの、あるいはパラリンピックも含めまして、五大陸にかかわるオペラが、作品が創作できたらというような希望をお出ししまして、それから皆様方にお諮りいただいた結果、東洋を舞台にしたオペラとしての「トゥーランドット」ですね。それから、ヨーロッパ大陸を代表したオペラとしてワーグナーの「ニュルンベルクのマイスタージンガー」という2曲が選ばれたという経緯がございます。

そして、この「トゥーランドット」に関しましては、トゥーランドット姫自体が中国のお姫様だということで、そして非常に難解な問題を出していく姫に対して、それに対して勇ましく果敢に挑む王子カラフという名前なんですけれども、私のコンセプト、それからあるいは演出家さんと話した結果、じゃあこれはもう日本の王子にしようじゃないかとい

うことで、いわゆる東洋、そして中国のお姫様、日本の王子という大きなコンセプトのもとに、この「トゥーランドット」を演奏するというのを、まずは今年19年、決めさせていただきました。

そして、20年はヨーロッパの代表的な「ニュルンベルクのマイスタージンガー」ということで、ワーグナーの大作品を選びまして、そして今年は「トゥーランドット」が7月12日、文化会館ということで、それから18日、新国立劇場ということで、そして「ニュルンベルクのマイスタージンガー」は20年の6月開催ということで2年にわたっての大きなプロジェクトになる予定であります。

そして、特筆すべきはこのプロジェクト両方とも、東京文化会館で始まりまして、それは新国立劇場が引き継いでいくという、いわゆる日本を代表する文化施設、劇場施設が手を合わせてつくる共同制作であるということですね。それから発展いたしまして、例えばびわ湖ホールとか、あるいは去年オープンいたしました札幌の芸術文化センターというのが、4つの劇場でもってつくり上げるということが今決まっております。

そして「トゥーランドット」から申し上げますと、演出家にはアレックス・オリエというバルセロナ出身の、ちょうど私バルセロナ交響楽団というところの音楽監督をしておりますけれども、そのバルセロナから、ラ・フーラ・デルス・バウスという芸術集団がございまして、そのトップ、芸術監督であるアレックス・オリエ。なぜアレックス・オリエかといいますと、1992年、バルセロナでのオリンピックのときに例の火の矢を聖火台にぱっと放つという演出をしたのがこのアレックス・オリエという人なんです。オリンピックつながりだということで、これは大変ふさわしい演出家が見つかったということで、彼自身は今オペラの世界で大変な優勢を誇っている人間でありまして、彼が日本で初めてワールド・プレミエールのオペラを演出するというので、これも大変話題になろうかというふうに思っております。

一方、「ニュルンベルクのマイスタージンガー」につきましては、おなじみのニュルンベルクの名歌手たちの歌合戦のオペラなわけですが、まずは演出にイェンス＝ダニエル・ヘルツォークという、現在ニュルンベルクの歌劇場の総監督をしている、彼以外にこれ以上ふさわしい人間があらうかという人に演出を頼むことができまして、そしてこのプロダクションは、文化会館、そして新国立劇場、及びオーストリアのザルツブルクの復活祭の音楽祭と、ドイツのドレスデンの歌劇場、この有数なフェスティバル、劇場と東京文化会館、そして新国立劇場のコ・プロダクションになっております。ということは、この19年から20年にかけて、非常に世界的な話題性を持ったプロダクションになるであろうということで、文化会館から始まり新国立劇場に引き継がれるということのかつてない企画ということも相まって、個性を極めようという力がわいてきているところであります。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。何か御質問等はございますか。

「トゥーランドット」、衣装はどういう衣装でやるんですか。

○大野評議員 ラ・フーラ・デルス・バウスのいろいろな美術部門の中に、例えば代表として香港を拠点にしている団体もあるわけです。ですから、そういうところのいろいろな美的な見識を全て集合させてくれるのではないかというふうに期待しております。

○青柳会長 で、マイスタージンガーはやっぱり6時間くらいかかるんですか。

○大野評議員 そうですね。そうだと思います。正味は5時間くらいですね。それで、休み時間を入れるとそのくらい、6時間くらいになるのではないかと思います。

ふだんは4時、ヨーロッパの劇場ですと16時開演の10時半から11時に終わるといような感じです。

○青柳会長 ほかに何かございますでしょうか。

じゃあ、すばらしいそういう何か所もの会館、今、出ているわけですね。

(ビデオ上映)

○青柳会長 じゃあ、よろしいですか。

それでは次に野田評議員のほうからよろしくお願ひいたします。

○野田評議員 一昨日、秋田で東京キャラバンをして帰ってきました。最初、映像を見ていただいて。

(ビデオ上映)

○野田評議員 これは2015年ぐらいからやっているものですけど。

最初、これは、アイデアとしては、街角のサーカスみたいなものが、文化的なサーカスができないかなという思いつきなんですけど、そういう夢のような一夜ができないかなと思って。ちょうど2016年、リオのときに、知事もいらっしゃいました。あのあたりぐらいから全体的に前向きに進むようになりまして、今、全国津々浦々からオファーをすごくいただいている状態です。だから、人と時間とお金が許せばどこでも行きたいというような状況です。

特徴としては、いわゆるこういう文化イベントというのは1人ずつのパフォーマンスをやっていくんですけど、これは、コンセプトとしては、文化の文の字が交という字に似ているというところから入っているので、あらゆるパフォーマンスがまぎって、次にどういう新しいものができるかという、その過程を見せようと。だから、まぎるところも見せるという、そういう意味では、お相撲さんの稽古風景を見せているような。それとこの場所と両方一遍に見せるような形で。だから、つくっている過程も見せています、各地で。それが非常に、見ている人としては見慣れていない風景なので、面白がってもらっています。

具体的には、交わるというのは、さっきの秋田のもので言えば、例えば、秋田民謡と一緒に、そのリズムをとって、ニューヨークから来たとてもすばらしいパフォーマーでタッ

ブダンサーの熊谷さんという方が一緒に秋田民謡とうまくやって、そこに今度は、自動車をつくりかえて1つのアート作品にしている宇治野さんの作品と3者のコラボレーションにしている。あとは、秋田では、なまはげと、それと、若い女の子のデュオに禁断の恋をさせて、それで、愛の賛歌を歌わせてなまはげが去っていくみたいな、そういうパフォーマンスをつくっていくと。見た人は、秋田の人も、こういうなまはげは見たことがないというのと同時に、こういうなまはげもまた見てみたいみたいな、そういう感想をもらいました。

あと、京都でやったものは、村田製作所のロボットと、あと、舞子さんが一緒に、そこもずっとかなり稽古を要したのですが、ロボットさんが風に弱かったりして、いろいろあったのですが、そういうところを全部見せて、実際に一緒に回ったりする。でも、新しいものと古いものだけの交わりじゃなくて、映像の最後にアイヌの歌と踊りが出たと思うんですが、あれは駒沢公園でやったのですが、それと、南の沖縄の琉球の音と、それを合わせると、結構時間がかかったのですが、非常に調和したときは感動的な瞬間が生まれて、とてもいいものができました。そういうふうに、文化のプラットフォームとして、今、東京キャラバンがすごく機能し始めているかなという気がします。だから、もともと東京オリンピックの2020年の文化プログラムであったのですが、最初の企画を出したときに、東京オリンピックを超えて文化遺産として残るようなものが必要ではないかということで始めたので、ぜひとも来年で終わることなく、その先ずっと、あのオリンピックを契機に遺産として残った文化プログラムだというような形になればいいかと思うんですけど、私は文化の最前線で頑張りますけれども、知事の後方支援をぜひ力強くいただきたいです。

○青柳会長 ありがとうございます。

今、大野さんと、それから、野田さんの発表がございましたけど、何か感想や御意見等はございますでしょうか。知事は何かありますか。

○小池知事 内容的にはどちらも素晴らしいものがあるので、それをどう知らせるかは、こちらのまさしく広報、両方の文字で必要でございますので、いろんな工夫をしながら多くの方々に知ってもらおうよう努めていきたいと思っております。

○吉本評議員 キャラバンは秋田と豊田でもやられているんですけど、たまたま私は去年、秋田と豊田に行く機会があったのですが、東京キャラバンが来てくれるということをすごく楽しみにしていच्छる様子でした。そういう意味で、東京と各地の地方都市が共同で何かをやっていくというのは今まではあまりやってこなかったと思うんですけど、野田さんもおっしゃっているように、これを機会に、2020年以降、オリンピックが始まって以降も、そうした地方都市との交流が続いたらいいなというふうに思います。

同じことは大野さんからも、琵琶湖だったり札幌だったり兵庫だったり、連携してやっているということがありました。今まで東京や文化会館がそういう事業をやられている

かどうかは存じ上げませんが、そういう流れもオリンピックを機に始まっているので、終わった後も大切にできたらなと思いました。

○青柳会長 ありがとうございます。

それから、先ほど話題になりました札幌芸術文化交流センター、あれは、札幌市が確か120億円かけてつくった、すばらしい図書館と劇場とコンプレックスになっているんですね。本当にすごいなと思ったんですけど、北海道の人に聞くと、札幌だけだと言うんですね。札幌の周りの230ある町は非常に厳しい状況にあるということで、ああいうのをどう文化でうまく、全体がうまくミックスされていくような状況になるのか、それこそキャラバンみたいなものが攪拌していただければと思いましたね。別の話題になってすみません。

○大野評議員 オペラの場合ですと、全曲をやるのは大きな劇場じゃないと無理かもしれませんが、でも、抜粋で、ピアノ1台さえあれば、3人とか5人の歌手たちを集めて、いろんなそれこそキャラバンの、横町でできるようなバージョンに改作することはすぐできるんですね。そういうことはもっともっとやっていったいいんじゃないかというふうに思っております。

○青柳会長 ほかに何かございますでしょうか。

どうぞ。

○太下評議員 今日は大野さんと野田さんからアーティストイニシアティブのプロジェクトの御紹介があって、冒頭でも「Tokyo Tokyo FESTIVAL」、これも基本的にアーティスト主導のプロジェクトですね。ぜひ、この中身の部分は、もはや世界に誇るアーティストの皆さんがしっかりやっていただければいいのかなと思いますので、私たちアーティスト以外が考えるべきは、そのコアの前後、前と後ろかなと思っています。前は何かということ、先ほど小池知事もおっしゃったとおり、気運醸成ですね。残念ながら、これだけいろんなことをやりながらも、まだオリンピックというものが、スポーツの祭典だけじゃなくて文化の祭典なんだと、文化プログラムがすごいんだぞと認識している都民というのは、実はそんなには残念ながらいないと思います。だからこそ、今日御案内があった広報とか、これから力を入れていくということなんでしょうけど、できれば、単なる広報とかイベントの展開だけではなくて、都民が自分事として関心を持って関わるような何かクリエイティブな仕掛けを文化プログラムにうまく絡める形で作り込んでいくことができれば、新しい文化プログラムの提案にもなるのかなというふうに思います。これが前後の前の課題ですね。

あとの課題は、よくレガシーと言うんですね。何を残せるのかと。これはいろんなやり方があると思うんですけど、今、改めて振り返ってみると、我々がこういう文化プログラムというものを一生懸命やっているそもそものきっかけは、実は、ロンドンオリンピックの終わった後に、彼らが物すごく熱心に日本に、そして、東京にアピールしてきたプレゼ

ンテーションだったわけです。映像のドキュメントもすばらしい。こういったことで、実は、御存じの方も思うんですけど、ロンドンオリンピック開催年の2012年は、イギリスへの国際観光旅客が減ったんですよ。考えてみると当たり前で、わざわざ混んで、恐らくホテルもレストランも高目のときに行く必要はなくて、だけれども、イギリスはクリエイティブな国である、都市なんだということを盛んにPRしたことによって、翌年以降の国際観光競争力をぐっとアップさせたんですね。そのことによって当然観光客が増えました。それを考えてみると、ポスト東京オリンピックで私たちが考えるべきことは、この文化プログラムですね。これが終わったあと、特に「Tokyo Tokyo FESTIVAL」や大野さん、野田さんのプロジェクトを中心に、こんなすごいことを我々はやったんだぜというのを、映像とドキュメントで、きちんと次につながるパリとかロサンゼルスとかその他の国々にアピールしていくことだと思います。

ぜひ、小池知事を先頭に、パリとかロサンゼルスとか、本当に世界に対して東京のクリエイティブな姿をアピールしていくべきだと思うんですけど、そのためには、さっき野田さんも、つくっている場面から見せていくんだみたいなコンセプトをお話になったんですけど、メイキングの部分から、映像を撮っていく必要があると思うんです。メイキング部分も含めて、ドキュメンタリーをきっちりつくっていく。さらに言えば、それをちゃんとアーカイブして、後々のオリンピック開催都市が参照できるようにしておくということも1つだと思います。

あと、以前もちょっとお話したんですけど、そもそも文化プログラムをやりましたというときに、どのぐらいの規模をやったのというカウントも必要だと思うんですね。何件やりましたと。この1件って、何をどう1件とカウントするのという、実は全然ルールはないんですね。イギリスのときも、実は各現場に任されていて、まちまちだったという実情があります。ぜひ、生真面目な東京、日本人がやるわけですから、何をどう1件と数えるのというルール、ルールブックをつくって、これを東京ルールとして、後々のオリンピックの開催都市に継承していけばいいと思います。ここからきちんと文化プログラムのカウントができるようになった、そういう歴史を刻むのも1つのレガシーかなというふうに考えます。

○青柳会長 ありがとうございます。

確かに、レガシー、例えばロンドンのときは、どこかの大学の学生たちが全部のいろいろアクティビティを見て、それをレポートを、ガッスだったかな、どこかがやっていますから、ああいうことを大学生なんかにもやってもらって、レポートをつくってもらえるといいですね。

ほかに何かありますかでしょうか。

ありがとうございます。

それでは、今日はこの2つのプログラムを御紹介したということで、どうかこれからも、

大野さん、野田さん、よろしくお願いいたします。

それでは、事務局のほうから、報告、よろしくお願いいたします。

○文化振興部長 それでは、最後になりますけども、事務局から2件報告させていただきます。

1つは、東京都現代美術館のリニューアル、それからもう1つは「パリ東京文化タンデム2018」の内容でございます。

まず、江東区にあります現代美術館は、平成7年3月に開館しましたが、施設全体が経年劣化しました関係から、平成28年5月末から約3年間休館しまして、全面的な大規模改修工事を実施しました。

このたび、改修工事が終わりました、平成31年3月29日にリニューアル・オープンを迎えることになりましたので、報告いたします。

それから、改修のポイントでございますけれども、1つは経年劣化への対応と機能の改善ということで、美術館におきまして重要な設備であります空調機器をはじめとします各設備機器の更新や、開館後20年以上経過した館内の床・壁・天井を全面的に更新するとともに、合わせて天井の耐震化を行っております。

また、照明につきましても、LED化を図るなど、環境負荷低減を実施しております。

それから、もう1つですが、利用者サービスの向上を行っております。展示室内の縦方向の移動の円滑化を図るために、エレベーターを増設したほか、多目的トイレのバリアフリー対策、それからトイレ内での子育て支援設備の充実などを行っております。

さらに、美術図書室の中の子供向けコーナーを拡張したほか、館内と中庭を行き来できます扉を新設しまして、建物内外を巡る回遊動線を再整備いたしました。

最後に、リニューアル・オープンを記念した展覧会等でございますが、2つの展覧会を開催いたします。

1つは日本の近現代美術について、1910年代から現在までの100年をコレクションする作品で総覧する企画展。それからもう1つは、休館中に収蔵しました作品を中心に、主に2010年代に制作されました作品群に焦点を当てるコレクション展でございます。

また、展覧会の開催に加えまして、スタンプラリーや小学校の和太鼓クラブの演奏などの記念イベントを実施する予定でございます。

今回の改修によりまして、さらに安全で快適に御利用いただける美術館として、新たなスタートを切るとともに、今後も国内外の多様な現代アートを皆様にお届けしてまいります。

現代美術館のリニューアル・オープンにつきましては以上でございます。

それから、前回の評議会で御案内いたしました、「パリ東京文化タンデム2018」につきまして、開催結果を改めて御報告いたしたいと思っております。

タンデムでございますが、まず東京都では昨年9月より、パリで「アール・ブリュット

ジャポネⅡ」それから「FUROSHIKI PARIS」、それと「からくり人形の動態展示」の3つの事業を開催しました。

また、都内では、アール・デコの展覧会、それから現代工芸品の展覧会、それから大学生の東京・パリのポスターコンテストなど、8つの事業を開催したところでございます。

まず、初めに、パリで実施しました事業のうち、「FUROSHIKI PARIS」について御報告いたします。

昨年の秋にパリ市庁舎前広場におきまして、唐草模様の風呂敷包みをイメージしましたパビリオンを設置いたしました。このパビリオンの中には、風呂敷の展示や体験コーナーを設け、6日間で2万人を超える方々に御来場いただきました。

右上の画像がパビリオンに入って最初のコーナーで、風呂敷の由来を紹介しております。

左上の画像ですが、草間彌生さんや北野武さん、それからJean-Paul Gaultierさんなどの有名なアーティストの方々にデザインしていただきました、オリジナル風呂敷を展示しております。

画面の左下でございますけれども、風呂敷インスタレーションのコーナーで、風呂敷の100通りの包み方を展示しまして、1枚の布が姿を変えて、さまざまな用途に役立つということをお知らせいたしました。

右下の画像が、最後のコーナーになりますけれども、ワインボトルやバゲットなどを風呂敷で包む体験をしていただいたところでございます。

次でございます。

市庁舎壁面の歴史的人物43体の石像にも風呂敷包みを贈ったところでございます。

また、別の会場になりますけれども、パリ日本文化会館におきましても、風呂敷の展示やワークショップを行いました。先ほどのパビリオンの入場者に加えまして、石像を観覧された方、それからパリ日本文化会館の来場者を含めると、このイベント全体で約8万6,000人の方々においでいただきました。

それから、11月2日ですけれども、小池知事、それからイダルゴ・パリ市長、遠藤オリンピック・パラリンピック組織委員会会長代行などがパビリオンを視察されました。

また、多くのメディアに取材いただきまして、VOGUE、FIGARO、読売新聞、NHKほか140件のメディアなどに掲載されたところでございます。

また、イベントの実施に当たりましては、協賛企業や特別協力企業から多くの御協力をいただいたほか、各企業におきましても、さまざまな広報、PRを行っていただいたところでございます。

来場者アンケートでも、「とてもすばらしかった」、それから「日本に行きたい」などの好評をいただいております。パリの方々に楽しんでいただくことができたと思っております。

それから、日本の伝統や芸術としての風呂敷の魅力とともに、実際に風呂敷に触れ、包

む体験などを通じまして、日常生活で繰り返し使える世界最初のエコバッグとして、環境の知恵を伝えることができたと思っているところでございます。

続きまして、展覧会で「アール・ブリュット ジャポネⅡ」でございます。アル・サン・ピエール美術館におきまして、社会福祉法人愛成会と協力しまして、日本のアール・ブリュットを紹介する展覧会を3月10日まで、現在も開催しているところでございます。

今回の展覧会では、日本の作家52組の作品約640点を展示しております。海外で初めて展示される作家や作品も多く、パリ市民を中心にさまざまな人の心を惹きつけているところでございます。

来場されているのは、お子さんから御年配の方まで幅広い年代の方々に、日本の作品を御覧になるのは初めてという方が多く、個性が際立つ高い質の作品ばかりとか、多様にあふれた展示、とても満足したという感想が寄せられているところでございます。

それから、次は、「からくり人形の動態展示」でございます。この催しでは、19世紀前半に「からくり儀衛門」こと田中久重が日本各地で行ったからくり人形の興行を再現したところでございます。田中久重による「文字書き人形」、それから「弓曳き童子」などのからくり人形が、当時見世物興行で披露され、多くの人々を驚かせ、喜ばせたと言われているところでございます。

この催しでは、パリ日本文化会館小ホールにおきまして、夢からくり一座によるからくり人形の動態展示を1日5回実施しまして、延べ1,000人程度の方においでいただいたところでございます。

続きまして、東京で行われました事業でございます。

まず1つ目でございますが、アール・デコでございます。展覧会「エキゾチック×モダン アール・デコと異境への眼差し」でございます。この展覧会は東京都庭園美術館におきまして、色彩豊かな服飾とジュエリー、さまざまな装飾美術、そしてアフリカやアジアに触発された絵画に彫刻と、フランスの美術館所蔵の国内発公開の作品を中心に、96点を紹介したところでございます。

それから、続きまして、複合文化イベントということで、「Saison Rouge ~Weekend in Paris-Tokyo」でございます。代官山、渋谷エリアを中心に、音楽、ストリートダンス、映画など多彩なイベントが5日間にわたって開催されまして、若者を中心とする多くの都民が参加いたしました。

「Saison Rouge」は、ダイバーシティとサステイナビリティという2つのコンセプトを中心に展開しまして、多様な生き方や価値観が共有する国際都市パリの姿を、参加者の皆様に感じていただけたものと考えてございます。

それから、もう1つは、大学生の東京・パリのポスターコンテストでございます。首都大学東京とパリのグラフィックアート、建築高等専門学校の学生が参加するポスターコンテストでございます。両都市の学生には、東京とパリの2都市を自由に表現したポスター

を制作していただきました。

都内では、東京の優秀作品15点と、パリの優秀作品16点の合計31点を、小田急電鉄株式会社さんの協力を得まして、新宿スバルビルの工事の仮囲いに展示したところがございます。

また、同時期に、パリ市でも、サン・ジャック塔の柵に同じ作品が展示されたところがございます。

最後でございますけれども、現代工芸品の展覧会です。この展覧会では、34点の作品を3つのテーマ、「夢の中で思い描いた日本」それから「実際に訪れた日本」それともう1つ「すばらしい技術が生まれた故郷としての日本」に分類して展示を行いました。これは東京都美術館で行っております。

「パリ東京タンデム2018」については以上でございます。

それから、もう1つ、事務局からお話がございますが、次回の第27回の東京芸術文化評議会でございますが、それにつきましては、年度が変わりました5月中に開催をさせていただきたいと考えているところでございます。

それから、第6期のこの評議会の任期は2019年5月末となりますので、次の評議会が今期最後の評議会となるところでございます。

近々に評議員の皆様方には御予定を伺わせていただく予定ですので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

事務局からは以上でございます。

○青柳会長 以上で、今日の日程は終わりました。

最後に浅葉さんからなにか。

○浅葉評議員 すばらしいイベントを国内外でたくさん行われていますけれども、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の応援団というのが今、開催されてますよね。今日はちょっとエールを送りたいと思ひます。

Tokyo Tokyo!

○青柳会長 それでは、最後に一言お願ひいたします。

○小池知事 ありがとうございます。最後の景気づけで、ますます気運が高まる予感を十分感じとったところでございます。

というか、これからは、本当に一気呵成でやっていかなければならないということで、皆様方の御協力、よろしくお願ひ申し上げます。

ありがとうございました。

○青柳会長 小池知事、どうもありがとうございました。

これにて、第26回の東京芸術文化評議会を終了したいと思ひます。

どうも、今日はありがとうございました。

以上